

---

# 夢一夜 夕刻

sumi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢一夜 夕刻

### 【Nコード】

N1875U

### 【作者名】

sumi

### 【あらすじ】

夢の中のお話ですから意味がわからないからといって深読みする必要はありませんが、ホラー風味です。ちょっと気持ち悪いです。猫が沢山出てきます。苦手な方はお戻り下さい。

(前書き)

ホラー風味になってしまいました。

外に出たかった。

何故外に出たいかと聞かれればそこに明確な理由があるわけではなく出られない、という縛りに抗いたかったただけなのかもしれない

田舎に居を移すサラリーマンのように

校則を目の敵にする高校生のように

ひたすらに自らを束縛する物の、その外を目指した。

夕暮れが近づいていた、だから急がなければと思った。

門には鍵がかかっていることは知っている。では、別の道を探さなければならぬ。

私はいそいで廊下へと出た。

薄暗くはあるが、まだ灯りをつけるほどではない微妙な時のために窓のないこの場所は酷く暗い。

何かに引っかかって転んでしまわないように、

躓いて音を立ててしまわないように慎重に玄関へと辿り着く。

ゆっくりと扉を開くと赤い光が溢れた。

外はまだ空が赤い。

桃から橙、赤と見事なコントラストだ、白く走る雲は羽のようだし神々の世界だなと見とれてしまっただけから、自分のすべきことを思い出した。外に出なければ。

ふと、白い猫が目の端を横切り振り返った。私はその猫を知っていた『はくう白雨・・・！』

白猫はまるで私を誘導するかのようになささと先へ行ってしまう。

私は猫を追いかけて歩く。草を折る音も、砂利を踏む音も立てぬように細かいコンクリや土の上をつま先立ちで右の手を壁に伝いながら。

バランスを崩しませんように。小さな頃落ちれば大海原だと遊んだ

ことを思い出した。あのころは現実からすぐに脱出できる異世界を  
持っていた。

進むと庭に出た。白猫は見失ってしまったようだ。

やや手入れの遅れた芝と、ざんばらの高い木が二本。

猫が木に登っている、1・2・3・4・5・皆、後ろを向いてい  
るからこちらには気づいていないのだろう。よかった。

猫はしばしば集会を開くのだという、よく通る道でも様々な毛色の  
猫が3匹も4匹も固まっていることがある。狼などよりも一匹行動  
の多そうな彼らが一体何を話しているのか、なわばりの分け前だろ  
うか。やつら災害や病気の生き物に対する感も凄いらしい、日長一  
日寝ているだけにも見えるのだがそれなりに考えていることもやっ  
ていることもあるのかもしれない。それとも獲

・・・目を見開く

踏んでしまった。

微かだが音が鳴った。

猫が・・・

聞こえていないかも知れない

聞こえてもこちらのことなど気にしないかもしれない

鳴き声などあげられるとやっかいだ。

猫が・・・

ドクドクという音ばかりが耳につく

猫が・・・一斉に振り向くと・・・

皆、酷く大きな顔面をしていた。

目に焼き付けてしまつて1秒遅れた。

動かせるものがなくて2秒遅れた。

3秒目でやっと勝手に叫びそうになる自分の口を塞ぐ  
必死で堪える。

頭の中だけで吐き出す。

足に力を入れられる余裕。

全身全霊を使つて両の足を後ろに引き下げる。  
ずる・・・ずる・・・

建物の角に隠れる頃にやっと冷や汗が吹き出した。

震える手とよろめく両足で玄関へ向かう。

かき消そうとしても何度もフラッシュバックする。  
幾度も飛び出しそうになる声を塞いだ。

「アレ」は一斉に振り返った。

体は普通だった。頭がその倍以上だった。

現実味がない。よくあんな細い首であの頭を支えられるとか、どうやって重心をとるのかとか意味のないことばかり考えた。脳内が迷走している。追っては来なかった。

逃げなければならなかった。

裏に行けないのであれば、表の門から出る他に方法がない。家の中に静かに戻った。

居間から人の声が聞こえた。うつすらと扉が開いているから中が見える。

白い防護服とガス用のマスクを着ていて、手には何かの計測器を持って5、6名で話し込んでいる。

内容は知っている。

だが、ここから逃げなければならぬのだ。

陽はもう沈んでしまったから廊下は目を凝らしても闇しか見えない。家の中は当たり前だが熟知しているので、それでも進むことはできる。

たしかお風呂場だったはず。

目の前が黒に塗りつぶされていて、歩いている感覚がしない

一歩一歩歩いていることを確かめるようにして進んでいくと

微かだが光が反射してそれが洗面台の鏡だとわかったが、怖いので見ないようにした。

手探りで目的の物を探した。

カチャリと触れる物があったてほっとした。回収されていなかったらしい。

急いで、しかし間違いの無いように廊下を戻る。  
途中防護服の人達を脇目で見ながら通り過ぎ、すらりと玄関を抜けた。

満点の夜空だった。

私はわくわくしながらその鍵で門を開いた。

目が覚めて、隔離されていた理由を思い出した。

(後書き)

初めて小説を書ききりました。元ネタが大分前からあったので楽しかったというのがありますが、書いていて楽しかった！。ですが、読む方にとっては読みにくかったと思います。書くの楽しいなしかし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1875u/>

---

夢一夜 夕刻

2011年10月9日07時48分発行